2025年 6月10日
第201号

JR東労組 Yokohama

JR東労組横浜地本
発行人 椀田優一
編 集 情宣担当
ホームページ
http://www.jreu-yokohama1.jp/

イーハトーブ

6月10日号

昨年からの米不足により、米の高騰が続き、政府は価格高騰を抑える目的で備蓄米の販売を決定。先月末、随意契約によって売り渡された備蓄米の店頭販売が一部スーパーで始まった。価格が抑えられて嬉しい面もあるが、私たちは本当にそんなに消費できているのか？日本の令和４年度の食品ロスの発生量は約４７２万トンと推計され、その半数が家庭系と言われている。世界には食事すら満足にとれない人がいるのに、これだけの量がゴミとして廃棄されている。分け与えれば助けられた命もあるかもしれない。でも、実際に家で作って余った料理を分け与えるというのは無理な話だ。だったら、食べられない量は作らなければ良いし、食べられない量は注文しなければ良い。食べ残すということは、それだけ多くの命を捨てていることを意識しているだろうか？食べる時に言う「頂きます」の前に「命を」を入れているであろうか？

私が食べ残してはいけないと感じたのは、沖縄研修に参加して戦争体験者の壮絶な話を聞いてからだ。「食べられる」ことが当たり前の日本に産まれた私からしたら、食べ盛りの中学生でそんな経験をしていることが考えられないと感じた。沖縄研修では「戦争の悲惨さ」と「今の沖縄」以外にもう一つ学ぶことが「食の有り難さ」だと思っている。１つの料理に多くの生産者がいることと、「食べられる」ということが幸せなことを日本人は忘れているのではないか。懇親会の場でも出てきた料理を平気で残すように感じる。余るぐらいが丁度良いと言われていたが、やはりそれは間違いであると思う。とはいえ一人で全ての残り物を食べ切るのは不可能なので、一人ひとりが「食の有り難さ」を改めて感じ、食べ残さない文化をつくりあげていく必要があるのではないか。

（Ｋ・Ｏ）

イーハトーブとは

「注文の多い料理店」や「雨ニモマケズ」などの著者として有名な宮沢賢治による造語です。故郷の岩手県をモチーフとし、彼の心の中にある理想郷を示す言葉です。

社会に目を向け、新しいものを積極的に取り入れ、農民の生活向上のために最後まで尽力した宮沢賢治の生き方に学びながら、私たちも外に目を向け、私たちが安心して働き暮らせる理想郷を実現していこうという想いを込め、イーハトーブというタイトルで情報発信を行っていきます。